

# 子どもたちの学ぶ場を奪う夜間定時制つぶしやめろ！ 子どもたちを苦しめる「前期選抜」を廃止せよ！ 収容率を高め公立高校の役割を果たすよう求めます

－ 2016年度京都公立高校募集定員、入学者選抜要項に対する見解－

2015年9月2日 京都府立高等学校教職員組合常任執行委員会

京都府教育委員会（府教委）と京都市教育委員会（市教委）は、8月21日の定例教育委員会において、2016年度公立高校の募集定員と入学者選抜要項を発表しました。以下にその概要と私たちの見解を明らかにします。

## I 2016年度募集定員と入学者選抜要項の特徴と概要

### 1. 募集定員等について

(1) 来春の公立中学校卒業見込み 20,969人（前年度比 81人減）に対し、府立・市立をあわせた公立高校の募集総定員を 13,850人（前年度比 160人減）としました。

(2) 課程別では、全日制 12,860人（130人減）、定時制は今年度新設の清明高校を含めて 710人（30人減）です。通信制 280人は前年度と変更ありません。

(3) 鴨沂高校の定時制課程（2015年度募集定員 30人）を募集停止とし、定時制課程を閉じるとしました。

(4) 学校別の定員の増減では、鴨沂の全日制で 40人増、鳥羽・洛西・福知山でそれぞれ 40人減、北桑田が 20人減としました。

### 2. 学校新設、学科改編、入学者選抜の変更等について

(1) 京都市立高校では、洛陽工業（創造技術科）

と伏見工業（システム工学科）を募集停止とします。2校を統合した市立京都工学院高校を伏見区深草の立命館中・高校跡地に新設し、プロジェクト工学科（定員 180人）、フロンティア理数科（定員 60人）の2学科を置きます。

(2) 口丹・中丹・丹後通学圏の普通科で実施している前期選抜の募集割合を定員の 10%から 20%に引き上げました（現在、京都市・乙訓通学圏は 30%、山城通学圏は 20%）。

(3) 口丹・中丹・丹後通学圏の高校で、当該の高校がある通学圏以外の2通学圏から入学できる者の割合を、定員の「100分の10」から「100分の20」としました。

(4) 鳥羽高校定時制を桃山・朱雀高校定時制と同様の単位制に変更しました。

(5) 昼間2部制の定時制として2015年度に開校した府立清明高校は、初年度に続き120人を募集定員とします（4学級）。入学者選抜は初年度と変更なく、すべて前期選抜でA方式（定員48人）は学科試験（国語・数学・英語）、報告書、作文、面接で実施します。B方式（定員72人）は作文、面接で実施します。

(6) 2014年度に導入した前・中・後期の三段階選抜等の選抜方法については、大きな変更は見られません。

2015. 9. 2 号 外

# 京都府高

発行：京都府立高等学校教職員組合（府高）  
発行責任者：安寄 正  
TEL075-751-1645 FAX075-752-2988  
メールアドレス：honbu@kyoto-fuko.com

## Ⅱ 2016年度募集定員と入学者選抜要項に対する私たちの見解

### 1. 鴨沂高校定時制の募集停止に強く抗議し撤回を要求します

今回の選抜要項における最大の問題点は、昭和16年の府立一中夜間中学設立以来、長年にわたって夜間定時制の灯をともしてきた鴨沂高校定時制を募集停止としたことです。

府・市教委は1997年に洛北・山城・堀川3校の夜間定時制つぶしを行い、今回さらに夜間定時制つぶしを行いました。私たちは鴨沂定時制の募集停止に強く抗議し、これ以上の夜間定時制つぶしをやめるよう要求します。

#### (1) 意図的につくられた「鴨沂定時制不要論」

鴨沂高校定時制の募集停止が議論された7月30日と8月21日の府教育委員会では、募集停止にする理由として鴨沂高校定時制の志願者が激減したことをあげ、教育委員からは「志願者が少ないなら必要ない」などの意見が出されました。また事務局は「清明高校の不合格者のうち、中期選抜で鴨沂定を志願したのは2名」と説明し、あたかも鴨沂高校定時制が不要であるかのように描いています。しかし、これは明らかに事実を隠しています。

鴨沂高校定時制の志願者が大幅に減少したのは、2015年度の募集定員大幅減が受検者に不安を抱かせたからです。

鴨沂高校定時制の志願者は、ここ数年募集定員の40%台～50%台で推移し、2014年度入試では定員90人に対して49人の志願がありました。ところが、2015年度には清明高校の開校を理由に募集定員を90人から30人に大幅にへらしめました。その結果、志願者は17人に激減し、入学は14人とどまりました。

その一方で、近隣の朱雀高校定時制（定員90人）は、60人台～70人台で推移していた志願者が98人に増えています。京都市内の中学3年生に実施した11月時点の希望調査で朱雀の希望者は8人ですが、中期選抜の志願者は55人と6.9倍となっています。本来鴨沂高校定時制に行くべき子どもたちが、中期選抜受検段階で朱雀高校定時制に志願変更したことが看取できます。

明らかに事務局が事実をねじ曲げた情報を教育

委員に提供し、意図的に「鴨沂高校定時制募集停止やむなし」に導いたものです。

#### (2) 教育環境を悪化させ子どもたちの学ぶ機会を奪う夜間定時制つぶし

前述のように、2015年度に鴨沂高校定時制の募集定員を減らしたことにより、朱雀・桃山定時制ではほぼ募集定員いっぱいの入学生を受け入れざるを得なくなり、再度1年をやり直す生徒とあわせて30名の学級定員を超えるクラスも出ています。夜間定時制を減らすことによって、近隣の夜間定時制の教育環境がさらに悪化していくことが懸念されます。

また京都市教育委員会は、伏見工業高校の跡地に昼間・夜間の定時制高校を設置し、西京高校定時制を統合する方向であるとされています。そうすると、JR京都駅以北の京都市域に夜間定時制が朱雀高校1校しか設置されないこととなります。教育の機会均等を脅かし、希望する子どもたちに豊かな高校教育を保障するうえで由々しき事態が起こりかねません。

#### (3) 夜間定時制高校の役割は終わっていない

府教委事務局は、2015年度入試で清明高校を不合格となった166名のうち、公立中学校の卒業生152名の進路は、通信制4割、公立定時制3割、全日制2割であり、「多くは通信制を受検しニーズは多様である」と説明しましたが、夜間定時制のニーズがなくなっているわけではありません。市内夜間定時制の志願者は中学卒業生数が減少してもほぼ同じ水準で推移しています。

前述した京都市の新しい定時制単独高校新設にあたって発表した「創設に向けたまとめ」（2015年7月）には、市立定時制高校の現状について興味深い記述があります。生徒の状況では、「中学時代に不登校経験のある生徒は入学生のおよそ5～6割程度」「発達障害等による特別な支援を必要とする生徒も在籍者の1～2割」とし、「経済的理由はもとより…およそ7～8割程度の生徒がアルバイト」をしています。そして、「全国的に公立高校として『引きこもり傾向』にある生徒の教育保障が不十分」として、さまざまな生徒のニーズに応える高校の役割が求められるとして

います。そのうえで「学習保障に向けた少人数教育、きめ細かい指導」が求められるとし、「15～20名程度の少人数の講座」「専門職の配置」などが必要だと指摘しています。

府立の定時制高校の現状認識もほぼ同じだといえます。

府教委は口を開けば「勤労生徒はほとんどいない」として夜間定時制不要論を唱えます。しかし、不登校や引きこもりだった生徒が定時制高校で学び、仕事や社会生活を体験することで新しい自分を見いだしている生徒が多数いることを教職員や保護者は知っています。「正社員」は少なくなっていますが、アルバイトやパートなどで働く生徒は多数います。また、府教委はそのことを意図的に隠しているのです。

鴨沂高校定時制をなくすことが、特別な支援を必要とする子どもたちの教育の機会を奪い、夜間定時制の教育環境を悪化させることは必至です。子どもの貧困対策法の具体化が求められている今日の教育政策に逆行するものだといわなければなりません。

## 2. 改善されない公立高校の収容状況

近年の募集状況（次ページ【表1】「公立高校収容率の推移」参照）を見ると、公立高校の収容率は長らく60%台を維持し、不合格が近年で最も少なかった2011年度をピークに再び低下しています。2013年度入試で60%を割ったあとは改善がなく、とくに全日制収容率は一貫して低下傾向にあり、中学校卒業生の半数しか収容できません。定時制の募集定員減に関連して、府教委は「全日制的のニーズが高まっているから、全日制的の募集を増やせば定時制はへらしてもよい」と考えているようですが、逆に全日制的の収容率を下げているのが実態です。

昨年7月に発表された国民の相対的貧困率（2012年度）は16.1%、17歳以下の子どもの貧困率は16.3%と、いずれも記録のある1985年以降最悪の数値となっています。私立高校の選択が経済的に困難な子どもたちがいる中で、公立高校の収容率を下げ続ける京都府の教育行政の姿勢が問われます。公立高校の収容率を確保するとともに、私学にも安心して通えるように就学支援金制度のいっそうの拡充が求められます。

## 3. 「前期選抜」に検証の姿勢なし

導入から3年目を迎える「前期選抜」については検証の姿勢すらありません。検証の必要すらないと考えているのなら、あまりにも脳天気といわざるを得ません。

「前期選抜」とは、「前期」「中期」「後期」の三段階選抜の最初に行われる選抜です。募集定員の30%（市内・乙訓通学圏）、あるいは20%（山城通学圏、2016年度入試から口丹・中丹・丹後通学圏）を選抜する制度で、「何回もチャレンジできる」「入試制度をわかりやすくする」をうたい文句に、一般入試に先立って実施していた推薦入試や特色選抜を一本化したものです。

ところが実際には多くの子どもたちを競争と選別の渦に巻き込み、苦しめる制度となりました。

第1は、多数の不合格を出す制度です。

導入1年目の2014年度入試では、前期選抜の募集定員5,235人に対して受検者は12,367人へのぼり、府内全体で合格者5,269人に対して7,098人が不合格となりました。

導入2年目の2015年度入試でもこの傾向は変わりません。募集定員5,188人で11,648人が受検し、合格者5,207人に対して6,441人が不合格となりました。

京都市教委の担当部長は市議会で「9割は中期（選抜）で同じ学校を第1志望として選び…」と答弁しています。前期選抜と同じ高校を受けて合格するならば、なぜ何回も選抜をする必要があるのでしょうか。不合格となった多くの子は立ち直る間もなく中期選抜の出願をしなければなりません。不必要な不合格体験が多くの子どもを苦しめています。

第2は、入試制度がさらにわかりにくくなったことです。

前期選抜では、各学校がA・B・Cの三方式から選択することになっており、そのしくみも選抜の基準も非常にわかりにくい制度です。制度改定のねらいとはまったく逆の方向になっているのが実態です。このために多くの中学生・父母・教職員が振り回されました。

第3は、募集定員の100%を前期選抜でとる京都市内の普通科系専門学科にとっては、完全に「青田買い」の制度となっていることです。公立高校の「特色づくり」競争にいっそうの拍車をか

け、同じ公立高校の間の格差を拡大しています。

導入 1 年目に府教委は、渋々ながら新入生と保護者向けに新制度についてのアンケートを実施しました。定時制・通信制、私立高校入学生や不合格者が除外されるという不十分さはあるものの、制度の問題点を検証する姿勢はありました。今回はそうした姿勢すらありません。

京都府に先行して多くの都道府県が導入した複数回入試は、あまりの問題の多さに見直しの動き

が強まっています。近隣では大阪府教育委員会が 2016 年度入試から全校で実施する前・後期入試を廃止します。前期選抜だけで 2 万 5 千人を超える不合格を出してことへの府民の批判に応えざるを得なくなったことが理由です。

同じような状況でありながら、京都は制度の見直しを行う姿勢はありません。私たちはあらためて前期選抜の廃止を強く求めます。

【表1】公立高校収容率の推移

入試年度	中学校卒業生数	公立高募集定員	公立高収容率	公立高全日制定員	全日制収容率
2001	27,171	16,810	61.9%	15,450	56.9%
2005	23,876	15,075	63.1%	13,920	58.3%
2011	23,367	14,750	63.1%	13,740	58.8%
2012	24,309	14,830	61.1%	13,820	56.9%
2013	23,786	14,030	59.0%	13,050	54.9%
2014	24,577	14,240	57.9%	13,260	54.0%
2015	24,100	14,010	58.1%	12,990	53.9%
2016	24,102	13,850	57.5%	12,860	53.4%

\* 中学校卒業生数は国・公・私立中学校 3 年の合計生徒数(前年の 5 月 1 日現在)。

\* 公立高募集定員は全・定・通を合計したものの。附属中学校の定員(240 人)は除く。

### Ⅲ 公立高校の本来の役割を取り戻し、子どもたちに豊かな高校教育を

今日の公立高校に求められるのは、「特色づくり」競争や生徒集めに血眼になるのではなく、地元の父母・子どもたちの期待に応えた、地域に根ざした学校としての役割を發揮することです。そのために、私たちは次のことを要求します。

(1) 夜間定時制つぶしをやめ、夜間定時制で学ぶ子どもたちのために、小規模でも学校を配置し、少人数教育などきめ細かな教育環境を整備すること。

(2) 府立高校の統廃合をやめること。通学圏の拡大化、選抜の複数化(前期選抜)をやめ、地元の高校で安心して学べるように、「地元枠」の設定など、入試制度の改善を行うこと。

\* 府教委は 2015 年 8 月に「生徒減少期における府立高校の在り方検討会議」を設置し、府北部地域だけでなく、南部地域も含めた府立高校の再編(統廃合)をねらっています。こうした動きに反対します。

(3) 高校における少人数教育を積極的にすすめます。生徒数が減少する北部地域を手はじめに、学級定員を 40 人以下にし、少人数授業を拡大し

ます。定時制課程ではさらに少人数教育をすすめます。どの高校、どの課程に行っても豊かな教育が受けられるよう教育環境の整備を求めます。

(4) 府立高校の「特色化」の名による類型化(差別化)に反対します。すべての府立高校で豊かな高校教育を保障されるよう求めます。

\* 府教委の「府立高校特色化推進プラン」では、府立高校 46 校を「スーパーサイエンスネットワーク京都」(8 校)、「グローバルネットワーク京都」(8 校)、「京都フロンティア校」(24 校)、「スペシャリストネットワーク京都」(6 校)に分け差別化を図っています。

(5) 府高・京教組など連名で 2012 年に発表した「子どもたちに格差のない、豊かな高校教育を保障するための私たちの提案(第 1 次・第 2 次)」の実現のために努力します。

\* 「第 1 次・第 2 次提案」はこちらでご覧になれます。

<http://www.kyoto-fuko.com/category/kenkai>